

## 三河国渥美の俳諧—『伊良胡崎』と『十かへりの花』を中心に

鹿島 美千代\*

The Haikai in Mikawa Country Atsumi — Centering on *Iragozaki* and *Tokaeri-no-hana*

Michiyo KASHIMA

## 抄録

本稿は三河国渥美（愛知県田原市）に関する俳書『伊良胡崎』及び『十かへりの花』を中心に、そして『十かへりの花』成立前後において、渥美に来訪した美濃派宗匠に関する資料である『はつほとゝぎす』・『若葉』・『雨の松』に基づいて、渥美俳諧の動向と美濃派宗匠たちの渥美における門人指導について考察するものである。まず子礼編『伊良胡崎』では渥美俳人が一五名入集していた。芭蕉や杜国を慕い、その上に生活にゆとりのある土地柄であることが渥美に俳諧を根付かせたことを論じた。さらに寛政元（1789）年には子蔵編、杜国百回忌追善集『十かへりの花』が刊行された。先の『伊良胡崎』では渥美連衆が一地方入集者の域に止まっていたが、この『十かへりの花』では渥美連衆による短歌行が筆頭にあり、発句一五句が入集していることから、渥美連衆を中心とした初めての撰集であったと言える。そして『はつほとゝぎす』・『若葉』・『雨の松』には『十かへりの花』編集に関する事項や美濃派宗匠と渥美連衆の句が書き留められ、美濃派の指導実態を知ることができる貴重な資料であることを論じた。

## Abstract

This article argues about the trend of Atsumi (Aichi Prefecture Tahara city) haikai and the guidance to haikai poets by the Mino haikai masters at Atsumi, centering on *Iragozaki* and *Tokaeri-no-hana*, and based on *Hatsuhototogisu*, *Wakaba* and *Ame-no-matsu*, materials about the Mino haikai masters who visited Atsumi.

First the book *Iragozaki*, which was edited by Sirei, selected 15 Atsumi haikai poets' works. It argues that haikai was rooted at Atsumi because Basho or Tokoku were adored and people lived in affluent circumstances there. Moreover in the Kansei first year (1789) Sizou edited and published *Tokaeri-no-hana*, a collection for the hundredth anniversary of Tokoku's death. In *Iragozaki*, Atsumi ream was still trended as ones of local haikai poets, but *Tokaeri-no-hana*, begins with a Tankakou of the Atsumi ream and contains 15 haiku, therefore it is possible to say that it was the first book centering on the Atsumi ream. It also argues that *Hatsuhototogisu*, *Wakaba* and *Ame-no-matsu* are valuable materials by which we can know the actual state of the Mino haikai masters' guidance, for they note the things about the edit of *Tokaeri-no-hana* and haikus of Mino haikai masters and Atsumi ream.

\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程  
Doctoral Program  
Graduate School of Library, Information and Media studies, University  
of Tsukuba

## 1. はじめに

渥美(愛知県田原市の南部)は貞享四(1687)年一二月、同地の保美村(はじめは畠村)に隠棲していた門人の杜国を芭蕉が訪ね、その折に「鷹ひとつ見付てうれしいらご崎」の句を残したことで有名である。これが渥美地方と俳諧との機縁を作る発端となった。芭蕉没後は渥美の先端にある伊良湖崎が芭蕉遺跡と追善の地としての役割を担う場所となった。芭蕉没後すぐに弟子の支考が『笈日記』の旅において渥美で芭蕉の遺吟を収集している。その後、宝暦九(1759)年跋、渥美出身の中村子礼編『伊良湖崎』をはじめとして、寛政元(1789)年序、子蔵編、杜国百回忌追善集『十かへりの花』が刊行された。さらに『十かへりの花』成立前後において頻繁に渥美に来訪した美濃派宗匠に関連する資料である『はつほとゝぎす』・『若葉』・『雨の松』が残されている。本稿はそれらに基づいて渥美俳壇の成立と動向、そしてそこに関わった美濃派宗匠たちの渥美における門人指導の実態を考察するものである。

## 2. 中村子礼編『伊良湖崎』—白梅下路喬を中心とする渥美俳壇

### 2.1 『伊良湖崎』の概要

前記の『伊良湖崎』成立は芭蕉没後六五年であった。本集は連句発句集で五九丁、中村子礼編。橋屋治兵衛板。藤園堂文庫蔵(国文学研究資料館にマイクロフィルム所蔵、他にも所蔵有)。巻頭の宝暦九(1759)年一月子礼自序は、伊良湖を絶賛し芭蕉来訪とあわせて本集刊行の由来を記す。本文冒頭では杜国の家僕であった家田与八の末裔で、保美(田原市保美)住の俳人白梅下路喬のもとに伝わる芭蕉真蹟「いらご崎にる物もなし鷹の声」を掲げて、それが「鷹ひとつ見付て嬉し伊良湖崎」に改案されたことを述べ、「鷹ひとつ」を立句とした脇起し五〇吟五〇韻、白尼や也有発句による短歌行二巻、白尼一門による長歌行、竹林下連雨水らによる八句表、菊里下不去庵連魯帆らによる首尾吟が並ぶ。次いで三河連衆が登場し、保美邑の八句表、中垣内の六句表、岡崎の六句表、矢作の八句表、二川駅の六句表二、名古屋の六句表と一〇句表、仮名詩七言で連句は終る。なお連句の脇句はすべて子礼がつとめている。

次は発句で尾張・三河連衆の「伊良湖崎眺望」九、保美邑・亀山邑の「伊良湖崎寄名所鷹の吟」六、各地から寄せられた「各詠鷹」五八、白尼の「四季鷹の吟」四、

川子と子礼の応酬句で一区切りとなる。

続いて芭蕉とゆかりのある三河・尾張の土地に芭蕉句を筆頭に置き、保美の里五、畠邑九、田原一二、吉田六、下地一、国府(発句三・六句表)、鳳来寺(発句四・六句表)、御油八、藤川九、笠寺五、熱田一〇とそれぞれ発句を収めている。ここまでが本編である。

以下は「余興四季之吟」で春七三、夏五一、秋七二、冬五六の四季の発句が掲出される。次いで美濃派俳人の発句七、楓左楼馬六発句による八句表、「各詠」の発句一七が並び、「懐旧」と題した支考・杜国・越人ら故人の発句九、最後に宝暦九年一二月の去角跋文で終る。以上となるが、本集は編者子礼の努力もさることながら、白尼一門および名古屋の有力な連衆の応援によって成立したことも注目しなければならない。

### 2.2 編者子礼について

編者子礼の閲歴については、去角跋文に「子礼老人は三陽伊良湖崎に程ちかき郷里の産にして、かつて居を尾府にとゞめ今はた世を遁すまして滑稽の隠士なり」とあり、伊良湖の近くで生まれたこと、以前名古屋に住み、現在は隠居の身であることがわかる。また隠居の身となった時期については、也有立句の短歌行前書に「撰者も仕官のほだしを遁れてよりやゝ二十年」とあり、『伊良湖崎』編纂の宝暦九年より二〇年前の元文五(1740)年頃に致仕しているのである。また宝暦一一(1761)年五月序、呂朝編『夕がすみ』(藤園堂文庫蔵、国文学研究資料館にマイクロフィルム所蔵)は、同年一月二四日に没した子礼の追善集であり、子礼の閲歴がより詳細に分かる。入集する立和の句の前書に「古稀をまたずして臨終」、また帰夕の句の前書にも「七句に遠きにあらねども」と七〇歳前に没しており、仮に宝暦一一年に六九歳で没したとすると、生年は元禄六(1693)年と推測できる。また羽墨の追悼句文に子礼を「中村其節坊」と記していることから、子礼は中村姓であった。この『夕がすみ』には也有や暁台の長い追悼句文が寄せられており、彼らが子礼を高く評価していたことがわかる。

また呂朝の追悼句文には、

其節坊子礼は三州渥美の郡の産にして間氏の長臣たりしが、終に五湖の舟に棹さして象潟の漂泊に蕉門の跡をしたひ、伊良湖崎の選集に古郷の風景を顕す。(後略)

とあり、これにより子礼が渥美の出身であったこと、「間氏」の長臣であったこと、致仕後、芭蕉の足跡を訪ねて象潟行脚したことがわかる。この「間氏」という姓の藩士については『稿本藩士名寄』(名古屋市蓬左文庫

蔵)及び『士林派洄』[1]に「間」という姓がないため「間」という文字で通じる「間宮氏」だと推測できる。この「間宮」の宮を省略して「間氏」と称したと考えられる。そのような推測ができるのも、この「間宮氏」と渥美とは深い関わりがあるからである。『稿本藩士名寄』・『渥美町史：歴史編上巻』[2]によると、渥美の畠村・古田村・伊川津村・亀山村・日出村は元和元(1615)年～同五年まで旗本間宮之等の知行地であった。元和五年に初代間宮之等は致仕し畠村に居住するが、二代間宮正等が徳川義直に仕えて以来、代々間宮氏は尾張徳川氏の家臣であった。子礼が仕えたと考えられるのは三代間宮之政の時代である。彼は間宮氏の家臣として名古屋に在住したのであった。それゆえ『夕がすみ』白尼序文に記すように反喬舎巴雀に師事し、巴雀没後はその息白尼の門にいたのであった。子礼はこうした俳歴を生かして『伊良胡崎』を成立させたのであった。

### 2.3 子礼の渥美来訪と渥美連衆

子礼は「伊良胡行脚の道すがら吟行の跡もなつかしく其所へ(筆者注：翻刻中の「へ」は、繰り返しの踊字を示すものである。以下同)を尋ね其あたり近き風士の句を請ひて集の後に附す」と記すように本集編集に際し、前記の白梅下路喬のもとを訪れ芭蕉句に因んで次の八句表を得た。

此度撰集をおもひ立れし其節坊(筆者注：子礼)の頭陀をたすけていらごの磯部に遊ぶ

今もその鷹にわたるや伊良胡崎	三州保美邑
	白梅下路喬
霧もこころも晴て嶋山	子礼
蓋の夜八に月を引うけて	冬華
扇をぬいた側に脇差	李三
法名に成て目出たい長寿院	其柳
大殿からも紙に千疋	鴉朝
当年と日南の雪とくれて行	理笙
つもりてたのしことの葉の塵	筆

これが三河の連句の筆頭に掲げられ、「保美邑」とあることから渥美地方の俳人の存在を知ることができる。

さらに発句の部では次の「伊良胡崎寄名所鷹の吟」が掲げられている。これらは芭蕉の「鷹ひとつ」句で有名になった鷹と、当地の名所を組み合わせ自讃したものである。

はつ鷹の月の鏡や恋路が浦	保美邑	路喬
鷹の名の色やかはらで磯馴松	同	冬花
汐風の夜寒や鷹の屏風石	同	其柳
かけ衣の錦や鷹の小山崎	亀山邑	鴉朝

架鷹の岩根の松や蔦かづら	同	理笙
鷹の来て名を立にけり文の磯	同	李三

(各句の鷹と名所には筆者が独自に下線を付した)

作者は保美邑三人、亀山邑三人で先の八句表の連衆と重なる。これにつづく「各詠鷹」では、他の地名に混じって畑(畠)村から左久良と麦里、畑村に隣接する古田村折立から喜平の句が入集している。

それ鷹の鈴や伊良胡の神送り	三州畑邑	左久良
おきわたりする荒鷹やいらご崎	同	麦里
日とみて鷹も渡るや伊良胡崎	同折立	喜平

また芭蕉ゆかりの地の部でも「梅つばき早咲ほめむ保美の里」で詠まれた「保美の里」が、各地より優先して最初に置かれ、前出の白梅下路喬・冬華・其柳・亀山の鴉朝・李三ら五人の発句が見られ、いずれの句も梅椿を詠み芭蕉を偲んでいる。

続く「畠邑」では畠村六句と古田村折立の一句を掲げている。

畠邑	杜国が閑居を尋て
麦はえてよき隠れ家や畑村	翁
紅井の夕日に松も錦かな	廬川
山への紅葉や触て渡り鳥	麦里
南天の色や身に入秋の風	初夕
植てまつ翌の御成や菌狩	麦志
蝶へを舞せてみまし菊畠	歌竹
物数寄の籬やかほる菊畑	松秋
青麦や兎の走る浪の崎	折立 幸佐

以上、『伊良胡崎』に入集する渥美連衆は次のようになる。

畠	七名	佐久良・麦里・廬川・初夕・麦志・歌竹・松秋
保美	三名	白梅下路喬・冬華・其柳
亀山	三名	鴉朝・理笙・李三
折立	二名	喜平・幸佐

このうち畠村からが七名で最も多い。前述のように元和元年～同五年まで畠村は間宮之等の領地であり、間宮氏の菩提寺である間宮山栖了院もある。畠湊があり、物資集散の拠点となっていたことから渥美の中心地であった。伊勢・尾張・三河塩浜所へ塩薪、熱田・名古屋には薪木・松葉・柴を移出し、廻船業や商売を生業とする裕福な商人が居住する土地柄であった。商人には在郷商人ばかりでなく尾州商人の出店も多い。正徳元(1711)年「三河国渥美郡畠村差出シ御帳」の商店二〇軒のうち一〇軒が尾州商人の商店であり、内訳は尾州大野(常滑市)八軒、尾州柴崎村一軒、名古屋杉町一軒である[3]。尾州大野の商人は主に知多木綿を販売していた。畠村に

はその後、旗本戸田氏の領有を経て大垣新田藩の領有になった際には陣屋が置かれた。

畠村の俳人のうち麦里は安永六(1777)年成立の下郷学海著『伊良虞紀行』[4]に「此所は戸田淡路守殿御領にて、その代官宮川麦里子(善左衛門)は米林北朶(同行の俳人)の知る人にて、いづれも尋ねてよる、主夫婦こよなう気軽なる人にて、翁の麦生ての書院にてもてなさんとて、いとねもごろにせらる」とあり、麦里は大垣新田藩代官であったことがわかる。「麦生えてよき隠家や畠村」の芭蕉真蹟を家蔵し、「麦生えて」と名付けられた書院まであった。また『伊良虞紀行』では「観音堂の有所にいたる、梁の上に西国三十三所のほとけを画て、その上にはゆる巡礼のうた有、いづれも杜国の書なるよし」を麦里が語ったことが記されている。また保美の其柳は『伊良虞紀行』に「吉田其柳(庄六)の所蔵せらるゝ翁の文など拝し」とあり、通称を吉田庄六と言ひ、元禄三年正月一七日付杜国宛芭蕉書簡を家蔵していた。同書では路喬のもとに「先主の珍藏せらるゝ翁の真跡」があることを記しているが、この芭蕉真蹟は俳文「保美の里」である。他に路喬のもとには「杜国の書」もあったようだ[5]。また折立には間宮氏の屋敷があることから、折立の二名は間宮氏関係かと考えられる。

このように芭蕉や杜国を慕い、その上に生活にゆとりのある土地柄であることが渥美地方に俳諧を根付かせ、それが子礼に『伊良胡崎』を編集出版させる動機となったのである。そして寛政元(1789)年には子蔵編、杜国百回忌追善集『十かへりの花』が編纂されることになる。

### 3. 『十かへりの花』—渥美連衆による初めての俳諧撰集

#### 3.1 『十かへりの花』の先行研究

『伊良胡崎』より三〇年後、寛政元(1789)年に杜国百回忌追善集『十かへりの花』が成立した。本集は追善連句発句集で九丁、子蔵編。橘屋治兵衛板。豊橋市図書館橋良文庫蔵(橋良文庫A913-87)。この『十かへりの花』については大磯義雄氏に『『十かへりの花』解説』の御論考がある[6]。『十かへりの花』の翻刻を掲出し、美濃派以哉派道統第六世是什坊(朝暮園傘狂とも)の高弟百茶坊の書き入れがある稿本『十かへりの松』と刊本との校合[7]、保美にある路喬及び杜国の墓碑の紹介、そして南岑寺の過去帳より杜国の没月日を元禄三年三月二〇日と推定され、最後に『十かへりの花』の簡単な解説を付されている。そこで本稿では大磯氏の御論考に導か

れて『十かへりの花』の内容を正面から検討する。なお本集の「削正」に関わった百茶坊の周辺についても触れたい。

#### 3.2 稿本『十かへりの松』に記された百茶坊の指導と渥美連衆

まず書名について、刊本は『十かへりの花』とするが、稿本の表紙中央には「十かへりの松」と墨書してある。「松」から「花」への変更については百茶坊の書き入れがないため、子蔵及び渥美連衆の意向のようである。巻頭の子蔵自序は「杜国豊嘗百年忌記事」と題して、まず杜国が貞享初めに名古屋から畠村に隠棲し、能書家で医業を生業としていたこと、杜国のもとに師の芭蕉が来訪して「麦生へてよきかくれ家や畠村」ほか芭蕉真蹟が渥美に残されていること、後に杜国が保美村に移住したこと、元禄三年春、臨終の際に遺骸を畠村西郊潮音原の大松樹の下に埋めるように遺言したことなどの、杜国に関する事績が記される。次いで『十かへりの花』編纂に関する事項が述べられる。寛政元年三月二〇日が杜国百回忌に当たり、百年忌をかねてより杜国の家僕の末裔である白梅下路喬が計画していたが編纂途中で急死したため編纂を子蔵が受け継いだこと、そしてその草稿を路喬の孫子と渥美社友に相談して「削正」を百茶坊に依頼し、他国からも句を集めたことが記されている。

序文を書いた子蔵は、寛延元(1748)年生～文政一一(1828)年没。名は良翰、号は桂下窓・麦生舎など。渥美を知行していた大垣新田藩戸田家の藩医であった[8]。浜田岡堂編『蕉門人物便覧』によれば潮音原に建立された杜国の墓及び碑文は子蔵の父、原兵右衛門によって成されたと記されている[9]。子蔵が杜国追善集の編纂を願い出たのも、杜国を慕う父の影響によるものであった。

序文に続いて「杜国居士百回忌追善」前書きで、白梅下路喬の「十かへりの花は淋しし塚の松」を立句として一三吟短歌行を取める。稿本では「万菊丸杜国居士百回忌追善短哥」(「善」は「福」と書いた上に重ねて書き直す)とあり、百茶坊は「此に前書入申候はゞ可然様奉願上候」と注記する。一三吟短歌行の路喬発句「十かへりの花は淋しし塚の松」は、百年に一度花が咲くと言われる松の花の下に、杜国の遺言通り造立された墓を詠んでいる。脇は編者子蔵の「今も朽せず其名甲ふ春」で、百年経ても杜国の高名なこと、そして第三の免孔「養祖入の姉も妹も来揃ふて」では、路喬の姉や妹までがこの追善に参加したことを示している。

短歌行の連衆の内訳は、

保美	五名	路喬・梅居・路十・旭邑・都水
亀山	四名	免孔・為蝶・斗百・理笙
畠	二名	子蔵・都明
小塩津	一名	素竜
執筆	一名	百茶坊(執筆は無記名であるが稿本より百茶坊の作句と判明する)

である。先の『伊良胡崎』の連衆からは路喬・理笙の二名が引き続き入集している。保美住の俳人が多く入集しているのは路喬とその息梅居など、路喬の縁者が入集しているからであろう [10]。亀山の免孔・為蝶は兄弟で、後に子蔵と芭蕉百回忌追善集『鷹の石ぶみ』を共に編纂する。兄の免孔は大垣新田藩郡奉行、弟の為蝶は茶道・華道を能くした人物である。また畠の都明は『伊良胡崎』連衆の大垣新田藩代官宮川麦里の子であろう。連衆の中に大垣新田藩に関わる俳人がいるが、これは渥美が大垣新田藩の知行地であったためだと考えられている [11]。元和元(1615)年～同五年まで間宮氏の知行地であった五ヶ村はその後、大垣藩主戸田氏鉄の二男氏経(妻は間宮之等の娘)に後継され旗本戸田氏の領有となり、その後、元禄元(1688)年七月に大垣新田藩として立藩した。戸田氏は参勤交代を行わない定府大名で江戸住である。寛政初年の藩主は天明五年六月に家督を相続した七代戸田氏興の時代であった [12]。

なお拳句の執筆の箇所については稿本で百茶坊が、  
草の筵も芳しき晴 筆  
拳之義、執筆ニテ宜も不被思召候はゞ免孔子蔵の内ニ被遊可被下候。

筆句にてよろしく候。

と記している。百茶坊の指示は「執筆」とした拳句が気に入らなければ、免孔と子蔵の方で決めていただきたいが、執筆の句ということでお願いしますとある。さらに稿本では、この短歌行の後に「名録 手向 各詠」と前書して諸国の発句を掲出しているが、この「名録 手向 各詠」の箇所に百茶坊の貼紙があり、

右短歌行  
諸邦追福吟  
おのへこまやかなる前文あり  
事繁きにこれを略す

と記されている。「事繁きに」が刊本では「事繁き故」となっているが、百茶坊の指示通りに前書が直されているのである。これらが序文に言うところの百茶坊の「削正」である。

### 3.3 『十かへりの花』『諸邦追福吟』と「追加」

短歌行に続く「諸邦追福吟」は四六句あり、これらの

句は渥美及び渥美周辺の三河地方と他国とに分けられる。まず渥美連衆は一五名が入集しており、巻頭の追善短歌行の連衆と顔ぶれはほぼ重なる。『伊良胡崎』では渥美が一地方入集者の域に止まっていたが、渥美連衆による短歌行が筆頭にあり、発句一五句が入集していることから、この『十かへりの花』は小冊ながら先の『伊良胡崎』よりも渥美色が濃く、渥美連衆を中心とした初めての撰集であったと言えよう。保美は白梅下路喬の縁者を中心として、その他は子蔵の縁者や職業上で繋がりがあつた俳人で占められている。

そして三河国からは御油一・牛久保一・御馬三・西方二・前芝三・吉田三・田原四の発句が収められている。御油の冬里は『伊良胡崎』から引き続き入集している。冬里は西方の群鴻の妻の一族であり、西方の子好・群鴻は兄弟であった [13]。前芝のうち巴江は本名を加藤広正と言い廻船業を営む富豪である [14]。吉田の中には蝶夢門の木朶がいる。田原の麦甫は伊勢派の俳人、また麦甫の妻の実兄は吉田の古帆であり、またの俳号を麦雪といった [15]。

他国の俳人については、まず尾張から三名の入集があり「諸邦追福吟」の筆頭に掲げられている。三名は『伊良胡崎』を編纂した子礼の師白尼の門人である。また東武・播州のそれぞれ一句は美濃派俳人である。さらに伊勢山田の六名は神風館連衆である。美濃派俳書に神風館連衆は一切入集しないことから、この神風館連衆は渥美連衆との関係で入集した連衆である。渥美の伊良湖神社と伊勢神宮とは神御衣の祭を通して関係があり、そのため伊勢神宮外宮の権禰宜を中心とした神風館連と親交があつたと考えられる。また前述したが田原の麦甫や吉田の古帆は伊勢派であり、麦甫らの後押しによって神風館連衆が入集したと考えることもできよう。次いで京からは蝶夢が入集している。蝶夢は墨直集を刊行するなど、美濃派とは非常に関係が深い。また蝶夢は吉田住の木朶の師でもあつた。遠州から入集している虚白・方壺は蝶夢門で木朶の知己である。「諸邦追福吟」は以上である。

次いで「追加」として西尾の五句(うち道日記二)が並べられ、西尾は渥美と同じく三河国内であるが別の扱いを受けている。西尾筆頭の五周は西尾藩家老である [16]。また西尾連衆には五周の長子鳳兮がいる。西尾に続いて再度「追加」として美濃の一二句が並ぶ。百茶坊を筆頭とし、最後の美濃派道統第六世朝暮園傘狂(是什坊)の句は跋文の体裁を示している。この西尾・美濃の二つの「追加」箇所については刊本と稿本とで異同がある。稿本においては「追加」が三つあり、最初の「追加」には畠村の烏有と還童の句、及び東武の桃岡の句が並べ

られ、次の「追加」には「追加 美濃」として百茶坊から朝暮園傘狂(是什坊)までの一二句、さらに最後に「追加 西尾」として西尾の五句を記した貼紙がある。最初の「追加」の烏有・還童の二句は刊本では畠村都明の後に、東武の桃岡は尾城和狂の後に挿入されている。これは稿本に挿入の印があり、百茶坊の指示によるものであった。さらに「追加」の美濃・西尾も刊本では西尾・美濃の順に入れ替えられている。なお稿本の「追加」箇所字体については、「追加 美濃」は百茶坊の筆、朝暮園傘狂(是什坊)の句文は自筆、また「追加 西尾」はさらに別筆と考えられる。

しかし百茶坊や朝暮園傘狂(是什坊)という渥美連衆の宗匠、また高位の五周を含む西尾連衆をなぜ「追加」として巻末に置いたのだろうか。普通であれば別格扱いで巻頭に置くはずである。これは白梅下路喬の遺志を継いで子蔵が編纂した『十かへりの花』に対して、後から関係した百茶坊の配慮によるものと考えられる。この配慮は、稿本中に書き入れられた百茶坊の指導が師と弟子という関係ではなく、到って丁寧な言葉遣いでなされていることからわかる。

### 3.4 渥美連衆と美濃派との関わり

さて渥美連衆とはそれまで関係がなかった百茶坊だが、この『十かへりの花』の「削正」のため渥美に來訪している。「削正」は前書の変更、巻頭一三吟短歌行の挙句、句の並べ替えに及んだ。では百茶坊がなぜ渥美に來訪して『十かへりの花』の稿本を「削正」することになったのだろうか。これについては渥美が大垣新田藩の領地であったために、同じく美濃国を本拠地とする美濃派の俳人が來訪したと推測されている[17]。しかし江戸においてあらかじめ相談され実行されたことも考えられよう。つまり大垣新田藩は定府大名である。この時代の上屋敷は外桜田、下屋敷は小日向茗荷谷にあった。百茶坊の師朝暮園傘狂(是什坊)は、美濃国不破郡竹中家の家臣として宝暦二(1752)年に側用人となって以来江戸勤めであった[18]。その間、安永九(1780)年に道統第五世以哉坊より道統を継承する。江戸において大垣新田藩と朝暮園傘狂とは関係があり、江戸にいる師朝暮園傘狂の指示によって百茶坊は『十かへりの花』「削正」に協力したと考えられるのである。

さらに前述した『伊良胡崎』の刊行も同様のことが考えられる。『伊良胡崎』にはすでに美濃派道統五竹坊・以哉坊が入集しており、渥美連衆が師事を受けるのに美濃派が一番近い俳諧流派であったと考えられる。またこの『伊良胡崎』には東武の文東・文井・朝宇・左涼・寄朝

の五名が入集していた。文東は希古庵と称し、美濃・撰津に知行地を持つ二〇〇〇石の旗本大嶋雲四郎義苗であった[19]。朝宇は希古庵二世文岡の舎弟雨宮宮多であり、文東を中心とした希古庵グループが江戸で形成されていた。美濃派道統五世以哉坊をはじめ、六世是什坊(朝暮園傘狂)、七世白寿坊の三道統は江戸と密接に関係する。以哉坊は江戸に五回も行脚して東武獅子門との交流を図り、是什坊(朝暮園傘狂)は江戸勤め、そして白寿坊は江戸下谷住の大番与力出身であった。

江戸において大垣新田藩と美濃派とは関係があり、さらに『伊良胡崎』に入集していた東武獅子門との関係があつて、『十かへりの花』の「削正」を目的とした渥美訪問の指示が、江戸において江戸住の朝暮園傘狂(是什坊)から美濃にいる百茶坊に出されて実現したと考えられるのである。

百茶坊の句は、

芳野にて我も見せふぞ松笠と翁の吟行にしたがい、  
万菊丸の仮名に聞へし隠士社国の百回忌にあ  
たれる春、予も此地に遊び、社中とともに廟参の  
杖を曳きて、

けふは塚の桜に脱ぐや松笠 百茶坊

とあり、百茶坊は渥美に來訪して墓参を果たした。百茶坊は師朝暮園傘狂の指示により各地へ代参行脚をするなどして次代道統宗匠を期待された人物であった。この百茶坊の渥美來訪については次節で詳しく述べることにする。

## 4. 百茶坊の渥美來訪—『はつほとゝぎす』・『若葉』・『雨の松』に見る門人指導

### 4.1 百茶坊の渥美來訪に関わる資料

前述した『十かへりの花』は百茶坊が「削正」し、指導を施した俳書であったが、このため寛政元(1789)年五月に百茶坊が渥美に來訪した。美濃派は全国各地に宗匠を営業行脚させるという方法によって勢力を拡大させていたが、また門人にとっても直接宗匠からの指導を受けるということは非常に名誉あることであった。

この百茶坊來訪に関わる稿本『はつほとゝぎす』及び『若葉』が残されている。共に田原市渥美郷土資料館蔵。『はつほとゝぎす』(資料番号 畠村四一三四)は半紙本一冊、袋綴じ。原装金糸雀色唐草表紙、縦二三・六糎×横一七・三糎。題簽中央「はつほとゝぎす」と墨書して貼紙。四二丁(うち一丁分白紙)。執筆年時は寛政元年四月～五月。執筆者未詳。もう一方の『若葉』(資料番号 龜山七四七)は小本一冊、双葉列帖装。本文共表紙。

縦二〇・二糎×横一三・七糎。表紙中央に「若葉」と墨書、四七丁。執筆年時は寛政元年五月～七月。執筆者未詳。『はつほとゝぎす』と『若葉』に記される内容は重複する部分もある。『十かへりの花』成立過程をはじめ、百茶坊と渥美連衆との短歌行や探題の句が書き綴られ、そこに百茶坊の添削が施されており、百茶坊の指導実態が詳細に分かる資料となっている。

#### 4.2 百茶坊の出立と三河国西尾への訪問

まず『はつほとゝぎす』の巻頭には、寛政元（1789）年四月五日に百茶坊が美濃国政田（岐阜県本巣市政田町）から出立した際の餞別句が記されている。

己に誇るべからず人にそむくべからずと百茶坊が  
三河行に餞して。

聞へあらばすみやかに飛べ明鳥 傘狂

首途

三河の人々のまねきに応じ草扉を出る比は夏もは  
じめの五日ならん。空清く梢そよぎて又見捨まじ  
き風となるにぞ。

花の後もわが杖さそふ若葉かな 百茶坊

（『はつほとゝぎす』）

百茶坊の行脚は朝暮園傘狂（是什坊）の指示によって実行されたことがわかる。この際には美濃国表佐（岐阜県不破郡表佐町）の俳人周路（大橋民治）も同行。渥美への途次、四月二日には三河国西尾藩に到着し西尾藩家老の五周亭で二一吟短歌行が興行された。

卯月十二日霍城於雪芦戸（筆者注：五周）興行  
前文略

待れては来よりつゝむ時鳥も 百茶坊

けふこそ晴るゝ卯の花の兒 五周

（以下略・『はつほとゝぎす』）

[連衆] 百茶坊・五周・周路・風弾・鳳兮・茶明・斎  
暁・楚石・志龍・雨耕・羽化・也静・壹之・里涛・淡  
交・李畔・悠翅・石羽・朝空・松居・程五

このうち五周（今井数馬）・鳳兮（五周の息）・風弾（坂伝九郎）・羽化・壹之は『十かへりの花』「追加 西尾」に入集している。この西尾訪問の際に『十かへりの花』に入集する句を百茶坊が集め、渥美連衆のもとへ届けたと考えられる。なぜなら稿本『十かへりの松』には一番最後に西尾の五句を記した貼紙があり、最後に届けられたということがわかるからである。西尾連衆は五周を中心とした西尾藩士連（雪蔦戸五周・風弾・鳳兮・茶明・楚石・志龍ら）と西尾町連（羽化・也静・里涛・悠翅・石羽・松居・程五ら）とで構成されていた。西尾藩士連は美濃派俳書に「在東武」という肩書で頻繁に入集する。

時代は下るが寛政七（1795）年刊、風廬坊編『枝折集』には「在東武三州西尾」として鳳兮・雪鼎が入集。また寛政一二（1800）年成、白寿坊編『夏的首途』上巻所収の巻頭餞別百韻は、在江戸連中六一名と江戸連中三二名が唱和した百韻であるが、在江戸連中のうち三河西尾連衆は一三名連座しており、美濃派と西尾俳人との関係の深さがわかる [20]。西尾連衆と美濃派が江戸と西尾でも交流していたように、大垣新田藩とも江戸においても交流があったと考えることは可能である。

#### 4.3 百茶坊の渥美到着

西尾訪問から約一ヶ月間後の五月一四日に、道日記（西尾市上道日記町）住の壹之（中嶋春調）も一行に加わり、三名で道日記より出立し一色（幡豆郡一色町）より船で佐久島・日間賀島へ渡り、五月一六日早朝、日間賀島から篠島、その後渥美中山港（田原市中山町）に到船して百茶坊は初めて渥美の地に足を踏み入れたのであった。

最初に亀山（田原市亀山町）住の斗百を訪問したが留守であった。この斗百は『十かへりの花』に入集している。亀山を出て保美（田原市保美町）へ行き、杜国の家僕の末裔である白梅下路喬の家へ立ち寄り路喬所持の芭蕉真蹟「保美の里」を拜見。この「保美の里」の全文は『はつほとゝぎす』に写されている。その後、畠村（田原市福江町）へ向かい宮川都明のもとで宿泊した。

祖翁の旧跡をしたひ来て畠村の官舎なる宮川氏の  
許にやどり求るに、我里なる臨篁主ハ兼てのしら  
せありとねむごろにもてなされて昔にかわらぬ里  
の繁栄に興ず。

麦秋のくれば寂ずよ畠むら 百茶坊

五月日和の庭に干もの 都明

（『はつほとゝぎす』）

宮川氏には『伊良湖崎』に入集していた大垣新田藩代官の宮川麦里がおり、『十かへりの花』にはその子孫と考えられる都明が入集していた。句の前書に「官舎」の語があることから、宮川氏は大垣新田藩に関わる藩士であることがわかる。また臨篁は百茶坊と同じく美濃政田住で別号を白千とも言うが、百茶坊来訪以前に渥美に来訪したことが前書よりわかり、もちろん『十かへりの花』にも入集している。翌五月一七日、百茶坊らは伊良湖崎を訪ねた。

岩は千重にたゝみ、松は屈曲に瘦て、白浪花とちり、涼風香をはこぶその奇景に筆をなげて、たゞ南海の渺々たる眺望に此鳥の一声に興ず。

引かへせ伊良湖の沖のほとゝぎす 百茶坊

空に只雲の峰あり伊良湖崎 周路  
 (『はつほとゝぎす』)

この百茶坊の句は寛政五(1793)年刊『鷹の石ぶみ』の巻末句として入集している。同日はその後、都明亭で「麦はへて」の芭蕉真蹟を拝見している。

#### 4.4 『十かへりの花』編纂作業

五月一日には畠村の大垣新田藩藩医である子蔵のもとへ百茶坊は初めて訪問した。

此地祖翁の詠ありといへども騷客の跡絶へて風流の道徳に荊棘を生るのみ。今幸に宗師の来杖を蒙り、暫高論を聞といへども其道や幽玄にして区々たる小子我案違ひたがらん。師しばらく杖を留て教をたれ給へ。

あふぐなりあふげど雲の峰高し 子蔵  
 (『はつほとゝぎす』)

子蔵の挨拶句は、芭蕉の後、久しく俳人の来訪が途絶えていたが、このたび百茶坊の来訪が叶い直接指導を受けることのできる喜びをあらわしている。午刻より宮川氏と立川氏の計らいにより釣船を浮て鱸を取った後、向山(田原市向山町)片山何某のもとで茶菓のもてなしを受ける[21]。その夜は子蔵亭で四吟首尾吟が興行された。

原生子蔵風子にはじめて雅縁を結び、この日とりなすその亭へ招かれ遊ぶに、主人は元より医仁の術に誉高く猶其余力あれば正風の滑稽に遊ばるゝより、そこにひとつの別室をしつらひ、うきよ半日の閑をたのしみて庭に一もとの鉢植は、かの彭祖が隠逸のもて遊びも外ならじとそれを賀して。

夏とても咲せて菊のかくれ家か 百茶坊  
 千代の因みを汲一夜酒 子蔵  
 (以下略・『はつほとゝぎす』)

[連衆] 百茶坊・子蔵・壹之・周路

百茶坊は子蔵が良医であること、本業の余暇には俳諧を嗜むため別室をしつらえたこと、その別室の庭には夏菊が咲いており風流な生活を営んでいることを誉めている。後に百茶坊はこの別室に「桂下窓」と名づける。五月一九日には都明亭で五吟首尾吟興行の後、『伊良湖崎』に入集していた保美の吉田其柳のもとで、元禄三年正月一七日付杜国宛芭蕉書簡を拝見している。夕方、亀山の為蝶亭へ赴き、ここで百茶坊は為蝶と初対面を果たした。

寛政元酉五月十九日於蔵六亭興行  
 こよひの茶話を催さむと為蝶風子の親切にまねかれはじめて芳亭に来れば、何くれのこと繁き中にも待もふけの心くばり、ねもころにまつとて端近

くいたはられ途中の汗を入るゝ頃は、やゝ黄昏の空なりける。

灯せぼたるしほらしそふな庭も見む 百茶坊  
 荒そのまゝに此木下やみ 為蝶

(以下略・『はつほとゝぎす』『若葉』)

[連衆] 百茶坊・為蝶・周路・理笙・斗百・子蔵・壹之・免孔

前書の「蔵六亭」とは為蝶の別号である。茶道・華道を嗜む為蝶の庵には趣のある上品な庭があり、暗闇迫る時刻に到着したために拝見できないことを惜しんでいる。百茶坊はこの際に為蝶の兄免孔とも初対面した。先に訪問して留守であった斗百や、『伊良湖崎』連衆の理笙も一座している。この日には深夜まで雑話があったと記されている(『はつほとゝぎす』)。子蔵・免孔・為蝶の主な渥美連衆が揃ったために『十かへりの花』編纂作業が行われたと考えられる。翌五月二〇日午後には白梅下路喬の子兎十が来訪し、為蝶亭において木朶発句の白梅下路喬追善一四吟短歌行が興行された。

酉五月廿日於蔵六亭にて

路喬子追善前書略

亡き跡も行末誉む梅椿 木朶  
 経声も口ごもるさへずり 兎十 (以下略・『若葉』)

[連衆] 木朶・兎十・兎鳳・子蔵・斗百・旭邑・路二・理笙・都水・路半・為蝶・志孝・路十・免孔

兎十の他、兎鳳や路二、路半、路十も白梅下路喬の縁者と考えられる。保美の旭邑・都水も一座している。同日には『十かへりの花』に入集する免孔・為蝶・理笙・都明の発句ができており(『若葉』)、この頃『十かへりの花』編纂作業は大詰めの段階だったのである。

翌五月二一日に百茶坊は畠村の都明亭に帰り、晩には田原の杜隣(田中伝吉)・無一(大久保探二)が来訪して八吟短歌行が興行された。この二名も『十かへりの花』に入集している。また兎十と古田(田原市古田町)の寂尔も来訪した。五月二二日は終日雑談(『はつほとゝぎす』)とあり、内容は記されないが『十かへりの花』編纂作業と考えられる。晩には免孔の万年亭へ赴き田原の二名を含めた一〇吟短歌行が興行された。翌二三日にも同亭で免孔発句の八吟短歌行があり、さらに連句付合の方法論「七妙八体」のうち「有心」「起情」についての百茶坊談話があった(『はつほとゝぎす』)。百茶坊には『百茶晋説』や『百茶坊夜話』などの俳論書が残されており論客としても優れていたのである。百茶坊は『十かへりの花』の「削正」指導をはじめ、渥美連衆と短歌行を何度も興行し、さらに美濃派俳論を講義することによって、渥美を美濃派の勢力下に完全に収めて師是



什坊からの使命を全うしたのである。

そして五月二四日、百茶坊らは渥美を出立したのである。

宮川都明兄ら餞別。

そも此地に船あがりせし日より留杖の始終宮川都明子の許に勞られ朝夕の饗しとも主老の心添大かたならぬは誠にはからざる値偶(ついで)といふべし。さぞあたりの佳景もあらましに見おほり、けふや帰杖を携むとするに其謝意を述むも、およぼすべき言葉なければたゞ何気なくいとまを告て。

梶の花かと我を笑れむ 百茶坊

明て名残も短夜の月 都明

(『はつほとゝぎす』・『若葉』)

前書の「およぼすべき言葉もない」から百茶坊句の「梶」には「口無」が掛けられている。百茶坊らの滞在は五月一六日から二四日までのわずか九日間であったが、この間に『十かへりの花』の編纂作業と「削正」指導が終わり、『十かへりの花』が完成したのである。

#### 4.5 寛政三年の百茶坊渥美来訪

再び寛政三(1791)年夏にも、百茶坊が渥美に来訪したことが稿本『雨の松』に記されている。この『雨の松』も田原市渥美郷土資料館蔵(資料番号 亀山七七三)。先に紹介した『若葉』と体裁は同一であり、表紙中央に「雨の松」と墨書、四〇丁。執筆者未詳。内容は寛政三年夏の百茶坊来訪から、同四年夏の風廬坊来訪までを書き留める。今回は百茶坊と共に宰賀(岐阜住大野屋仙蔵)が来訪した。渥美来訪の目的は『雨の松』三丁ウに、

三とせ先ならん。細竹庵の主師の御房初て草庵に来杖あり。相見奉り師弟の望もたりて、さるをことし東旅行の序、杖をとゞめまいらせ(後略)と記されているように、今回は江戸行の途中で同地に立ち寄ったことがわかる。渥美に到着した日時は不明であるが、『雨の松』の巻頭には四月二二日に百茶坊が亀山の免孔亭から同地に住む弟為蝶亭へ招かれた際の六吟短歌行興行が記される。

寛政三年辛亥夏四月廿二日

雨中のつれへを慰よと万年亭(筆者注:免孔)の居を転じて草園(筆者注:為蝶)の茶話に遊べば、壁上に飾らるゝ若葉の一素に五竹庵の風情をしたひ、床の夏菊に主人の手練の風姿を感ず。そのもてなしはしばらく言はず、まづは庭前の登樹に千歳不朽の風雅をことぶく。

そよがでも涼しさ足るや雨の松 百茶御坊  
(以下略・『雨の松』)

[連衆] 百茶坊・為蝶・子蔵・宰賀・寂尔・免孔

室内には若葉の一枝を飾り床には夏菊を活け、百茶坊をもてなすしつらえがしてあるが、目を外に転じて雨中の松の涼しい風情に心を留めている。同行した宰賀もこのもてなしを「風雅の信」と賞している。四月二六日にも為蝶亭で子蔵の弟鳳有を加えた七吟歌仙、翌二七日には桂下窓(子蔵)に赴き同連衆で七吟短歌行が興行された。

桂下主人はかねて道の法友といひ、このほど草園の席に膝をまじりて夜となく昼となくその談笑いまだ俣ず、けふや其亭に來り遊ぶに、此ぬしや医業のつとめもなかば舎弟の鳳有子にゆずりて老後の用意なる俳諧に遊ばゝやとて、そこの別荘に一館一窓の物好寄もおかしく、淋しき知足の姿もならんにはと感じ興じて。

この窓に足りてよ月も風の香も 高吟(百茶坊)  
(以下略・『雨の松』)

[連衆] 百茶坊・子蔵・宰賀・寂尔・鳳有・為蝶・免孔  
句の前書より『十かへりの花』にも入集している鳳有は子蔵の弟であることがわかる。同日か、百茶坊は渥美を出立したようである。

老師の遊杖を送り奉り尚帰杖の再会を約して。

むさしのゝ事の涼しみ待請ん 為蝶

渥美連衆は百茶坊との再会を期したが、これが百茶坊の最後の旅となり同年七月五日に江戸で百茶坊は没したのである[22]。

渥美においては杜国の隠棲が芭蕉来訪の機縁を作り、その杜国の家僕の末裔である白梅下路喬を筆頭として渥美に俳人が誕生した。そのため渥美出身の尾張藩士であった子礼が『伊良胡崎』を編纂する動機となり、渥美俳人が入集できたのである。そして白梅下路喬の遺志を継いで同郷の子蔵が渥美俳人を中心とした初めての撰集『十かへりの花』を編纂した。この編纂に当たって渥美連衆を指導した百茶坊の功績は大きく、渥美俳壇の基盤を固め、さらに渥美は美濃派の勢力下に収められたのである。百茶坊のこの功績は『十かへりの花』刊行の四年後、渥美における芭蕉百回忌追善集『鷹の石ぶみ』の刊行へと引き継がれていく。これについては後稿に譲りたい。

#### 注

[1] 『稿本藩士名寄』一〇〇「まノ三 家譜」(名古屋市蓬左文庫蔵 資料番号 141. 1), 『士林派淵』巻第七六「問宮」(名古屋市教育委員会, 校訂復刻名古屋

叢書続編第一九卷：士林派3，愛知，愛知県郷土資料刊行会，1984，p.376-382）。

- [2] 渥美町史編さん委員会，渥美町史：歴史編上巻，愛知，渥美町，1991，p.307-316。
- [3] 筆者は杜国が渥美に隠棲したのは、渥美に出入りしていた名古屋商人との関係があったのではないかと考えている。論文中に掲げた正徳元（1711）年「三河国渥美郡畠村差出シ御帳」（渥美町史編さん委員会，渥美町史：資料編上巻，愛知，渥美町，1985，p.110-122）のうちに名古屋の商店が一軒含まれている。

与右エ門かし家 尾州名古屋杉町

壹軒 綿諸色 与 八

とある。この「与八」について宝永六（1709）年「三河国渥美郡畠村人別生死増減住所改帳」（同。p.177-179）には、

当村与右エ門借家 尾州名古屋杉之町中橋九兵衛  
壹軒 入商人 与八良

とあり「与八良」の姓が「中橋」となっているところから、渥美において杜国の面倒を見た家田与八（白梅下路喬の先祖名）の「家田」姓とは異なり別人のようであるが、「与八」が共通することから参考までに挙げておいた。また延宝六（1678）年「三州渥美郡畑ケ村領日比浜御新田御検地帳」（同。p.255-271）には名古屋住の「与左衛門」他、名古屋のものが数名見られ渥美と名古屋との関係の深さがわかる。

- [4] 石田元季，俳文学考説，東京，至文堂，1938，p.391-393。
- [5] 其柳・路喬のもとに蔵された芭蕉真蹟については、大磯義雄，杜国新考（二），愛知学芸大学研究報告，No.2，1953，p.1-8（後に大磯義雄，芭蕉と蕉門俳人，東京，八木書店，1997に再録）を参照した。
- [6] 大磯義雄，“『十かへりの花』解説”，未刊国文資料：未刊俳諧追善集と研究，愛知，未刊国文資料刊行会，1962，p.128-133，p.194-217。
- [7] 稿本『十かへりの松』は現在，田原市渥美郷土資料館蔵（資料番号 亀山七七二）。半紙本一冊，袋綴じ，表紙中央に「十かへりの松」と墨書。八丁。この稿本の存在によって子蔵が編纂した最初の形態，そして百茶坊の指導を受け刊本『十かへりの花』に至るまでの経緯が明らかとなる。大磯氏は稿本の数箇所に見られる書き込みから『十かへりの松』が『十かへりの花』の稿本であること，そして書き込みについてはこの俳書を見ている百茶坊（細竹

廬）のものであるとされている。なお [6] であげた論文の稿本と刊本との校合中（p.195-196），以下については誤植がある。

(7) 刊本・稿本ともに「染みて」

(9) 刊本・稿本ともに「細竹廬」

(13) 稿本では「さびしし」

(18) 稿本の「執筆ニテ」の上に「拳之義」が脱落

(20) 稿本では「前文あり事繁きにこれを略す」

(38) 稿本でも「逢ふそ」

(39) 刊本・稿本ともに「影降」

(48) 刊本・稿本ともに「白千」

また校合中には示されないが，伊セ山田の「大一坊」が稿本では「大一房」となっている。そして刊本の翻刻中「代々経ても散らせぬ花の匂ひ哉 還童」の句は「散うせぬ」であり，稿本でも同じである。

- [8] 子蔵をはじめ渥美連衆の略歴については，近藤恒次，三河文献綜覧，愛知，豊橋文化協会，1954，323p 及び，渥美町史編さん委員会，渥美町史：歴史編上巻，愛知，渥美町，1991，p.626-628を主に参照した。
- [9] 鈴木勝忠，浜田岡堂：蕉門俳諧資料，東京，明治書院，1976所収『蕉門人物便覧』p.82-83には「三州渥美郡畑村潮音寺後潮音原万菊丸之墓あり。碑文は同村医師桂山（筆者注：子蔵のこと）が父原兵右衛門建所也」とある。また大磯義雄，原子蔵父子と路喬との杜国追慕，林苑，No.5，1983（後に大磯義雄，芭蕉と蕉門俳人，東京，八木書店，1997に再録）にこれに関する記述がある。
- [10] 連衆の中の一人，梅居については [6] 大磯義雄，“『十かへりの花』解説” 203p 及び前掲 [9]，大磯義雄，原子蔵父子と路喬との杜国追慕，で梅居を路喬の孫ではないかと推測されている。田原市渥美郷土資料館蔵『若葉』（資料番号 亀山七四七）三四丁ウに「保美なる家田氏は祖翁梅椿の玉吟家珍してあるじ別号も白梅下といふなるべし。賢息雅伯梅居君と改名し給ふも（後略）」とあることから梅居は路喬の息子であることが確認できる。『若葉』の詳細については4.1を参照。
- [11] 前掲 [6] 大磯義雄，“『十かへりの花』解説”，p.214には「当地の畠村は大垣の戸田家の分家戸田淡路守の領地である関係から美濃派の俳人が多く訪れ，その影響下にあったのである」と指摘がある。
- [12] 大垣新田藩については，岐阜県，岐阜県史：通史編近世上，岐阜，岐阜県，1968，p.530-533，木村礎・

藤野保・村上直, 藩史大事典第4巻中部編Ⅱ東海, 東京, 雄山閣, 1989, 90p, 渥美町史編さん委員会, 渥美町史: 歴史編上巻, 愛知, 渥美町, 1991, p.307-323 を主に参照した。

[13] 御津町史編さん委員会, 御津町史: 本文編, 愛知, 御津町, 1990, 375p。

[14] 広正が寛政元(1789)年四月に渥美に来訪した際の紀行文『伊良虞紀行』(渡辺和敏, 近世豊橋の旅人たち: 旅日記の世界, 愛知, 豊橋市二川宿本陣資料館, 2002, P.82-89)には『十かへりの花』編纂に関わる事項が記されている。広正は四月一二日畠村に着き, 伊良湖明神に参拝の後, 亀山に至り免孔のもとで宿泊。一三日には免孔の弟為蝶を訪ね, 為蝶との会話が『十かへりの花』の編纂に及んだことに言及している。

今年百年忌にあたりて, 此辺の俳士集ひて追善の俳諧興行ありしよし, また四方に乞ふて発句を集むとて, 亀山の為蝶子の談なりき, 予にも春季にて句を請る, 需に応じて,

塚の辺見ぬいにしへの春ゆかし

この広正の句は『十かへりの花』に巴江の俳号で入集している。すでに夏である四月一三日作の句が入集していることから四月中旬にもまだ編纂作業中であり, 白梅下路喬の急死によって『十かへりの花』の編纂が遅滞していることがわかる。

[15] 田原市教育委員会, 田原町史: 中巻, 愛知, 田原町教育委員会, 1975, 375p。

[16] 青山善太郎, 西尾町史: 下, 愛知, 西尾町役場, 1934, p.768-769 (1988年に複製版発行)。

[17] [11] に同じ。

[18] 垂井町, 新修垂井町史: 通史編, 岐阜, 垂井町, 1996, p.918-919。

[19] 東武獅子門の俳人については, 鈴木勝忠, 東武獅子門の展開: 墨直しをめぐって, 国語と国文学, Vol.36, No. 1, 1959, p.40-49 (後に鈴木勝忠, 近世俳諧史の基層: 蕉風周辺と雑俳, 愛知, 名古屋大学出版会, 1992に再録), 田 哲郎, 附 五東斎木朶交友の一端, 三河地方知識人史料, 愛知, 愛知大学総合郷土研究所, 2003, p.195-207, 寛真理子, “以哉坊の江戸行脚”, 近世文学研究の新展開: 俳諧と

小説, 堀切実編, 東京, ぺりかん社, 2004, p.216-225 に拠った。

[20] 白寿坊編『夏的首途』の在江戸三河西尾連衆は一三名(舞栄楼白翅・鏡裏坊水交・鳳兮・関鳥・其夕・其水・登化・雪鼎・李谷・葛路・巴鶏・臨水・桂斜)入集している。白翅は西尾藩藩主松平乗完(福井久蔵, 諸大名の学術と文芸の研究, 東京, 厚生閣, 1937, 642p), 水交は乗完の弟, 西郡(蒲郡)領主松平守惇。

[21] 立川氏も大垣新田藩藩士である。時代は下るが「幕末蔵分限帳」(前掲『渥美町史: 歴史編上巻』320p)の三州詰の藩士の中に「立川東太郎(詰組)」という名が見える。

[22] 真正町文化財審議委員会, 高木百茶坊, 岐阜, 真正町教育委員会, 1988, p.60-61 に,

百茶坊は祖翁百回忌を済ました後, 間もなく日時は明らかでないが江戸へ旅立ったのである。何の目的で江戸へ赴いたのか, その間の消息を語る文献も資料もない。(中略)百茶坊はこうした志を抱きながら, 長生不老の祈りもむなしく江戸滞留一年余にして寛政三年七月五日江戸の地で逝くなったのである。

とある。文中の「祖翁百回忌」とは寛政二(1790)年三月に洛東双林寺で朝暮園傘狂(是什坊)によって行われた芭蕉百回忌追善取越法要であるが, その後間もなく江戸へ出立したというのは明らかな誤りである。寛政三年四月下旬に渥美を出立していることから江戸には少なくとも六月には到着したと推測できよう。また同書で百茶坊の死亡年月日について従来の寛政二年説を高木家の過去帳写によって寛政三年説を提唱されているが, この『雨の松』よりも寛政三年までの生存が確認できる。

## 謝辞

資料の閲覧を許可してくださいました田原市渥美郷土資料館をはじめ諸機関に謝意を申し上げます。

(平成19年4月26日受付)

(平成19年6月7日採録)